

*World's
Famous
Classics*

48

世界文学全集

Л. Н. Толстой

АННА КАРЕНИНА II

トルストイ / 藤沼貴訳

アンナ・カレリーニナII

Anna Karenina

世界文学全集——48

トルストイ

1976年4月24日第1刷発行

訳者 藤沼 貴

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社 東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112

電話 東京 03(945)1111(大代表)

振替 東京 3930

製版所 株式会社まゆら美研

印刷所 豊国オフセット株式会社

製本所 株式会社国宝社



© KODANSHA 1976 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。
定価はカバーに表示してあります。(文3)

目次

第四編 (つづき)	7
第五編	39
第六編	173
第七編	312
第八編	429
年譜	487

装帧
||
アド・ファイブ

「アンナ・カレーニナⅡ」主な登場人物

アンナ——夫カレーニンと愛児セリョージャをすて、ウロンスキー伯爵のもとへ走るが、社交界は冷たくふたりに門を閉ざす。孤独の中でいら立ち、疲れた彼女はしだいにウロンスキーの愛に疑いを抱き、ついにすべてに復讐すべく、鉄道自殺を図る。

カレーニン——妻アンナが不義の子を産んでも、離婚を承知せず、何事もなかったかのごとく役人生活に逃避する。

ウロンスキー——アンナとのひたすらな恋ゆえに軍における昇進も犠牲にして、奔走する。だが、その社交性が逆に彼女の嫉妬をかりたて、彼を苦悩の淵に追いつめていく。

レービン——永年の思いがかなって、キティと結婚。田舎の領地にもどって一児にも恵

まれ、幸せな日を送るが、はたしてこれであるのか、と、自問するに到る。

キティ——レービンの妻となり、子を産み、平凡な幸福に満足している。

オブロンスキー——妹アンナがカレーニンと離婚できるようにと努力する。

ドリー——夫オブロンスキーの気まぐれになお悩みつつ、妹キティとレービンの家で、大勢の子どもを養育する。

ニコライ——レービンの実兄で、身をもちくずし、レービン夫妻の看病のもとで死ぬ。

コズヌイシエフ——レービンの異父兄で、独身の作家。

リジア伯爵夫人——アンナの去ったカレーニン家をとりしきる社交婦人。

アンナ・カレーニナ II

第四編（つづき）

十七

食事のあいだや食事のあとでかわされた会話の印象を、記憶のなかで無意識にひとつひとつたぐりながら、カレーニンは孤独なホテルの部屋にもどって行った。ゆるすようにと言ったドリーのことばは、かれの心にただ腹立たしさをよびましたただけであった。キリスト教のおきてを自分の場合にあってはめるか、はめないかは、かがるしく口にはならない、あまりにもむづかしい問題だったし、その問題をカレーニンはもうずっと前に「あてはめない」と割り切ってしまったのだ。いろいろな話のなかで、いちばんかれの脳裏に食いついていたのは、男らしくやっつたもんですよ。決闘をいどんで、殺したんですからね——という、まぬけで、お人よしのトゥローフツインのことばだった。みんな礼儀をわきまえて口にごそ出さなかったものの、それに好意的のうに見えた。

《それにしても、あのことはけりがついたんだ、考える

ことはない》カレーニンは心に言った。そして、目前にせまっている出発と監査の仕事のことだけを考えながら、かれは部屋にはいり、案内して来た女関番に、自分の従僕がどこにいるかをたずねた。従僕はたった今出ていったと玄関番が言った。カレーニンはお茶を持ってくるように命じ、テーブルのわきにすわると、フロム（一八七〇年に発行されたロシ）を手にとって、旅行のコースを考えはじめた。

「電報が二通」もどってきた従僕が部屋にはいりながら、言った。「申しわけありません、だんなさま、ちようど出かけてしまいました」

カレーニンは電報を受けとって、封を開いた。一通の電報は、カレーニンのがのぞんでいたちようどその地位に、ストレーモフが任命されたという知らせだった。カレーニンは電報をほうり出すと、赤くなって、立ちあがり、部屋を歩きだした。《Quos vult perdere demerito》（神は滅ぼさんとする人の理性を奪う）とかれは《人》ということばで、この任命に協力した者たちのことを考えながら、言った。かれが腹立たしかったのは、その地位を得たのが自分でなかったこと、自分が、あきらかに、おあずけを食わされたことではなかった。しかし、おしゃべりで、口先ばかりうまいストレーモフがほかのそれよりも、ここには適材でないのが、あの連中

にはどうしてわからないのか、不可解で、ふしぎだった、あの連中はこの任命によって自分自身を、自分の Prestige (威信) をだいなしにしたことが、どうしてわからないのだろうか！

「何かまたこういったたぐいのものか」かれは二通めの電報をひろげながら、苦虫をかみつぶしたように心に言った。電報は妻からだった。《アンナ》という青鉛筆の署名がまっさきに目にはいった。《キトクゴキタクヲセツニセツニコウ》オウルシウケテヤスラカニシニタシ——かれは読みくだした。かれはばかにしたようにうす笑いして、電報をほうり出した。これがうそで、策略だということは、最初の一瞬の感じでは、まったくうたがう余地がなかった。

《あいつはどんなベテンでもやりかねないんだ。あいつはお産をするはずになっている。もしかしたら、お産の病気かもしれない。それにしても、あいつらの目的はなんだ？ 赤ん坊を認知して、おれの体面を傷つけて、離婚をじやますることなのだ》かれは思った。《しかし、何かあのなかに書いてあったぞ——キトクとか……》かれは電報を読みかえた。すると、そのなかで言われていることそのままの意味が、かれをはっとおどろかせた。《もしこれが本当だったら？》かれは心に言った。《くるしんで、死がせまっているときに、あいつが心から後

悔しているというのが本当で、しかも、おれがそれをベテンと受けとつて、帰るのをことわったら？ これは無慈悲で、みんながおれを非難するだけではなくて、おれの方としてもばかげたことになる》

「ピョートル、箱ぞりを止めておけ。わたしはペテルブルグへ行く」かれは従僕に言った。

カレーニンはペテルブルグへ行つて、妻に会おうと決心した。もし妻の病気がうそなら、だまったまま出ていこう。もしかの女が本当に病気で、危篤で、死ぬ前にかれに会いたがっているのなら、生きているうちに会えれば、ゆるしてやろう、帰宅がおそすぎれば、とむらいだけはしてやろう。

途中ずつと、かれはもうそれ以上、自分のするべきことを考えなかった。

車中ですごした一夜のために疲れ、よこれた感じをいだいて、朝もやのなかをカレーニンはがらんとしたネフスキー通りをすすみながら、自分を待ちうけているものことは考えずに、自分の前を見つめていた。かれはそのことを考えることができなかつた、というのは、これからおこることを思いうかべると、妻の死がかれの立場のくるしさをすべて一挙に解決してしまふという予想を、追いはらうことができないからであつた。パン屋、しまっている店、夜の流しのそり、歩道を掃いている庭

番などが、かれの目にちらついた、そして、かれはそれをのこらず観察しながら、自分を待ちうけているもの、自分がのぞんではならないのに、それでもやはり、のぞんでいるものにまつわる考えを、自分のなかでおし殺そうとつとめていた。かれは玄関に乗りつけた。流しのそりと、眠っている御者をのせた箱ざりが表玄関のほとりにとまっていた。玄関にはいりながら、カレーニンはまるで自分の脳のはるか奥の隅から決心をとり出して、その内容をたしかめてみたようだった。そこにはこうして出ていくこと。本当ならば、世間のおきてをまもること」

玄関番はカレーニンがよびりんを鳴らすよりはやく、ドアをあけた。玄関番のペトロフ、またの名はカピトーヌイチじいさんが、古いフロック・コートを着て、ネクタイはつけず、スリッパをはいているという、奇妙なかつこうをしていた。

「どうだ、奥さまは？」

「きのうご無事に身ふたつになられました」

カレーニンは立ちすくんで、青ざめた。かれは自分がどれほどつよく妻の死をのぞんでいたか、今になってはつきりさとした。

「で、元気か？」

コルネイが朝の前掛け姿で階段をかけおりてきた。

「たいへんおわるうございます」かれは答えた。「きのうお医者さまの談合がございまして、今もおひとりお医者さまがおられます」

「荷物をおろせ」カレーニンはそう言うのと、やはり死ぬ見こみがあるという知らせに、いくらかほとした気持ちをあじわいながら、玄関の間にはいった。

洋服掛には軍服の外套があった。カレーニンはそれに気づいて、たずねた。

「だれがいる？」

「お医者さま、助産婦、それにウロンスキー伯爵さまで」

カレーニンは奥の部屋にはいった。

客間にはだれもいなかった。かれの足音をきいて、アンナの書齋からふじ色のリボンのついたボンネットをかぶって、助産婦が出てきた。

かの女はカレーニンのそばに寄り、死がせまっている遠慮のなきで、かれの手をとると、寝室に案内した。

「おありがたいことに、お帰りくださいませ！ただもうあなたさまのこと、あなたさまのことばかり」かの女は言った。

「水をください、はやく！」寝室から命令口調の医者の方の声が言った。

カレーニンはアンナの書齋にはいった。かの女のデス

クの前には、ひくい椅子の背に脇腹をむけてウロンスキーがすわっており、両手で顔をおおって泣いていた。かれは医者の声にに応じてとぶように立ちあがり、手を顔からはなして、カレーニンに気づいた。夫を見ると、かれはすっかり恥じいって、まるでどこかへ消えてしまいたいというように、肩のあいだに首をすくめながら、また腰をおろしてしまった。しかし、かれは懸命に自分をおさえて、立ちあがると、言った。

「あの人は危篤なんです。医者の話では、見こみがないということですよ。わたしのことはお気のすむようになさってくださいですが、どうかここにいますとおゆるしてください……しかし、わたしはあなたのおぼしめししいです、わたしは……」

カレーニンはウロンスキーの涙を見ると、他人のくるしみを目にしたときにあじわされる心のみだれが、高まってくるのを感じた、そこで、顔をそむけながら、かれはウロンスキーのことをしまいまできかずに、いそいでドアの方へ行つた。寝室からは、何か言っているアンナの声聞きこえていた。その声はあかるくて、元気で、抑揚がひどくはつきりしていた。カレーニンは寝室にはいって、ベッドにあゆみ寄つた。かの女は顔をカレーニンの方にむけて、寝ていた。頬は赤くそまり、目はキラキラ光り、小さな白い手は、ブラウスのカフスカ

ら突き出て、そのカフスをかからませながら、掛けぶとの端をもてあそんでいた。かの女は健康で生気にみちているばかりでなく、この上もなく上きげんのように見えた。かの女は早口に、よくとおる声で、ひどく正確な感情のこもつた抑揚をつけてしゃべっていた。

「というのはね、アレクセイが——わたしはアレクセイ・カレーニンさんのことを言っているのよ（ふたりともアレクセイだなんて、本当に奇妙な、おそろしいめぐりあわせだわ、ね、それでしょ？）アレクセイがわたしをはねつけなかつたらいいと思うからよ。あたしはわすれてしまふし、あの人はゆるしてくれたらね……でも、どうしてあの人は来ないの？ あの人はいい人よ、あの人は自分がどんなにいい人か、自分で知らないのよ。ああ！ たまらない、つらくって！ はやくお水をちようだい！ ああ、こんなことじゃ、あの子に、あたしの娘によくはないわ！ ま、かまわないわ、あの子に乳母をつけてやってちようだい。ま、あたし賛成するわ、その方がむしろいいぐらいいよ。あの人は来るわ、あの人はあの子を見たらつらいでしょう。あの子をかえしてちようだい」

「奥さま、だんなさまは来ておられます。ほらここに！」助産婦がかの女のカレーニンにむけさせようとつめながら、言った。

「まあ、なんてばかなことを！」アンナは夫が目にはいらずに、言いつづけた。「ねえ、あたしにあの子をわたしてちょうだい、あの子を、わたしで！ あの子はまだ来ていないわ。あなたたちが、あの子はゆるさないだろうって言っているのは、あの人を知らないからよ。だれも知らなかったんだわ。あたしだけよ、そのあたしだって、つらくなりました。あの子の目、知ってほしいわ、セリョージャの目がちようどあれとおなじよ、だから、あたしあの子の目を見ることができないの。セリョージャにごはんを食べさせましたか？ みんながわすれてしまうのよ、あたしちゃんとわかってるわ。あの人だったらわすれないんだけど。セリョージャを隣の部屋にうつして、マリエツトにあの子といっしょに寝るようにたのまないといけないわ」

突然かの女は身をちぢめ、しずかになった、そして、びっくりして、打たれるのを予期しながら、身をかばうように、両手を顔の方にあげた。かの女は夫に気づいたのだった。

「いいえ、いいえ」かの女は言いだした。「あたしあの人とはこわくない、あたしがこわいのは死ぬことよ。アレクセイ、こちらへ来てちょうだい。あたしは時間がないから、いそいでいるのよ、あたしはあとすこししか生きられないの、すぐに熱が出はじめて、あたしは何もかも

わからなくなってしまうわ。今ならわかる、何でもわかるわ、あたし何でも見えるもの」

しかめられたカレーニンの顔が、つらそうな表情になった。かれはアンナの手をとって、何か言おうとしたが、どうしても言い出すことができなかった。その下くちびるはふるえていたが、かれはやりまだ自分の動揺とたたかしながら、ただときおりかの女に視線を走らせていた。そして、視線を走らせるたびに、かれにはアンナの目が見えた——その目はかれがいままで見たことのないような、感動と感激にみちたやさしさで、かれを見つめていた。

「待って、あなたは知らないのよ……待ってください、待ってください……」かの女は考えをまとめようとでもするように、口をつぐんだ。「そうだわ」かの女は言いはじめた。「そうよ、そうよ、そうだわ。あたしはこう言いたかったのよ。あたしを見ておどろかないで。あたしいつもおなじ女よ……ただ、あたしのなかには別の女がいるんだわ、あたしその女がこわい——その女があの人を好きになったのよ、そして、あたしはあなたを憎もうとしたのに、昔いた自分をわすれられなかったの。あの女はあたしじゃない。今、あたしは本当のあたし、完全なあたしよ。あたしは今死にかけている、あたしは死ぬのよ、わかってるわ、あの人にきいてごらんさい。」

あたし今だってちゃんと感じるのよ、ほらあいつらがいる、重しが手と、足と、指に。指はほらどうでしょう——ずいぶん大きいわ！ でも、こんなことみんなすぐにおわってしまう……あたしに必要なことはただひとつだけ——どうぞ、あたしをゆるしてちょうだい、すっかりゆるして！ あたしはひどい女よ、でも、ばあやがあたしに話してくれたわ——受難の女聖者は——なんとという名前だったかしら——あたしよりわるい女だったんですって。それに、あたしローマに行くのよ、あそこには荒野があつて、あそこへ行けば、あたしはだれの迷惑にもならないもの、ただセリヨージャはつれていくわ、女の子もよ……いいえ、あなたはゆるせやしないでしょ！ あたしわかつて、こんなことゆるせやしない！ だめ、だめよ、あっちへ行つて、あなたはいいい人すぎるのよ！」かの女は片方の熱い手でかれの手をにぎり、もう一方の手でかれを突きつけようとするのだった。

カレーニンの心のみだれはますますつよまって、今ではもうそれとたたかうのをやめてしまふほどになった。かれはふいに、自分が心のみだれと思つていたものは、逆に、いまだかつて自分があじわつたことのない、あたらしい幸福を突然あたえてくれた、たのしくもしあわせな心の状態なのだ、とさつた。かれは、自分が生まれつてこの方したがおうとしていたキリスト教の掟が、ゆる

すことと、敵を愛することを自分に命じているのだ、とは考えもしなかった。しかし、敵を愛しゆるすよろこばしい感情が、かれの心をみたしていった。かれはひざまずいて、ブラウスごしに火のようにかれを焼くアンナの手の間節に頭をのせ、子どものように声をあげて泣いた。アンナはかれのはげかかった頭をだくと、そちらににじり寄つて、いどむような誇りの色を見せながら、目をあげた。

「こういう人なのよ、あたしわかつていたわ！ 今こそ何もかもゆるしてちょうだい、ゆるして！ ……また、あいつらが来たわ、どうしてあいつらは出ていかないの？ ね、この毛皮コートをぬがせてちょうだい！」
 医者がかの女の手をはずし、そつとかの女を枕の上におおむけに寝て、光る目で自分の前を見つめていた。

「ただこれだけはおぼえていてちょうだい、あたしがもとめていたのはただゆるしてもらふことだけだったのよ、それ以上あたしは何ものぞまない……どうして、あの人は来ないの？」かの女はウロンスキーのいるドアの方にむかつて、言いだした。「いらつしやい、こちらへいらつしやい！ この人に手をさしだすのよ」

ウロンスキーはベッドの端にあゆみ寄つた、そして、アンナを見ると、また両手で顔をおおつた。

「顔を出して、あの人を見るのよ。あの人は聖人よ」かの女は言った。「さ、顔を出して、出してちょうだい！」かの女は腹を立てて言いだした。「あなた、この人の顔を出させてやってちょうだい！ あたしこの人を見たいの」

カレーニンはウロンスキーの手をつかんで、顔からはなした——それは、にじみ出た苦惱と羞恥の表情で、すさまじい顔であった。

「この人に手をさしのべてやって。この人をゆるしてやってちょうだい」

カレーニンは目からほとばしる涙をおさえようともせず、かれに手をさしのべた。

「ありがたいこと、ありがたいことだわ」アンナは言いだした。「これで何もかもととのつた。ただ、もうちょっと足をのびさなきや。そう、そう、それで申し分ないわ。なんてあの花の描き方は趣味がわるいんでしょう、全然スマイレに似てないわ」かの女は壁紙をゆびさしながら、言った。「ああ、たまらない！ こんなこといつになつたらおわるの？ モルヒネをくださいな。先生！ モルヒネをくださいな。ああ、たまらない、たまらないわ！」

そして、かの女は床の上でのたうちはじめた。

その医者や、ほかの医者たちの話では、これは産褥熱で、結局は死ぬ確率が十中九分九厘までだ、ということだった。一日じゅう高い熱と、うわ言と、意識の混濁がつづいた。夜ふけ近くには、病人は意識がなくなり、ほとんど脈もなくなつてよこたわつていた。

今にも臨終だと、予想された。

ウロンスキーは家に帰つたが、朝には安否をたしかめにやってきた、すると、カレーニンはかれを玄関の間に迎えて、言った。

「しばらくいてください、アンナがあなたをよんでくれと言うかもしれません」そして、自分でかれを妻の書齋につれて行った。

明け方にまた、興奮と、活気と、目まぐるしい考えやことばがはじまり、また、最後は意識がなくなつてしまつた。三日めもおなじであつた、そして、医者たちはのぞみがあると云つた。その日、カレーニンはウロンスキーのいる書齋に行き、ドアにかぎをかけて、かれのまむかいにすわつた。

「カレーニンさん」ウロンスキーは話しあうときが近づくを感じて、言った。「わたしは口をきくことができませんが、判断がつきません。わたしをゆるしてください。あなたがどんなにおつらいにしても、わたしはもつとひどいんです、本当に」

かれは立ちあがろうとした。しかし、カレーニンがその手をとって、言った。

「どうかわたしの言うことをしまいできいてください、ぜひともそうしていただかなければ。あなたがわたしのことで誤解をなさらぬように、わたしは自分の気持ちを、今までわたしを動かしてきたし、これからも動かしていきたいような気持を、あなたにご説明せねばならないのです。あなたもご存じのように、わたしは離婚を決意して、その手続きまでではじめております。あなたにはかかず申しますが、その手続きをはじめながら、わたしはまよっております、わたしは悩んでいたので。あなたにうちあけて申しますが、あなたとアンナに復讐したいという思いがわたしを責めさいなんでいたのです。電報を受けとったとき、わたしはやはりおなじ気持でここへやってきました、それどころか——わたしはアンナが死ぬのを願っていたのです。しかし……」かれはウロンスキーに自分の気持をうちあけるべきか、うちあけるべきではないか、ためらって、しばらく口をつぐんだ。

「しかし、わたしはアンナを見て、ゆるしてしまつたのです。すると、ゆるすというしあわせがわたしに自分の義務をさとらせてくれました。わたしは完全にゆるしたのです。わたしは別の頬をさしだしたいのです、上着をとられるなら、下着をあたえたいのです、そしてただ、

わたしからゆるすしあわせを奪わないようにということだけを、神に祈っているのです！」涙がカレーニンの目にたまっていた、そして、あかるい、おだやかなまなざしがウロンスキーをつよくうった。「これがわたしの立場なのです。あなたはわたしを泥のなかにふみにじつても、世間の笑いのにしてもいい、わたしはアンナをすてませんし、けつしてあなたに非難のことは申しません」かれは言いつづけた。「わたしの義務はわたしにははつきりきまっています——わたしはアンナといっしょにいなければなりませんし、いるつもりです。もしアンナがあなたに会いたければ、お知らせしますが、今は、はなれておられる方がよいとわたしは考えます」

カレーニンは立ちあがった、そして、むせび泣きがかれのことばをときらせた。ウロンスキーも立ちあがると、体をまげたまま、のびさない姿勢で、上目づかいにカレーニンを見た。かれはカレーニンの気持がわからなかった。しかし、これは何か自分より高いものなのだ、自分の人生観にとらわれている自分には、およびもつかないものだ、とウロンスキーは感じていた。

十八

カレーニンとの話がおわると、ウロンスキーはカレー